

(日本経済新聞 夕刊 25年9月7日発行)

廃校に復興の息吹

東日本大震災の被災地で 石巻市雄勝地区では、2001年度に廃校になったとして再生、活用する動き 「旧桑浜小学校」の改修作業が進む。宮城県石巻市では築90年の伝統建築の廃校舎を改修し農漁業を体験できる自然学校を開く計画が始動。養殖場やホテルに転用する例もある。校舎などの資産を有効に活用するとともに、産業が衰退する被災地に人を呼び込み雇用を創出する。

伊藤忠商事出身の立花貴さんらが設立した公益社団法人「sweet tree at311」が事業を手掛

「旧桑浜小学校」はボランティアの手も借りて改修作業が進む(8月14日、宮城県石巻市)

農漁業体験やホテル

被災地、人呼ぶ施設に改装

ける。震災後、雄勝地区で支援活動をする中で人を呼び込む拠点施設の必要性を感じ廃校活用に踏み切った。廃校は宿泊もできるように改装。近隣の漁業者など住民にも協力を求め農漁業や木工品作りなどの体験プログラムを用意する。来年の開業を目指す。

容量7トの水槽を3基設置し、昨秋に稚魚約7千匹を放した。オスは来秋にも中華料理などの食材として出荷し、メスは6、7年育ててキャビアを採取する計画だ。

岩手県陸前高田市では11年春に閉校した築42年の「旧矢作小学校」がホテルに生まれ変わった。市が1億円強をかけて改修。1教室を6つに分けてベッドを備えた個室を42室、畳敷きの大部屋を3室用意した。1泊2500～3500円で最大74人が泊まれる。観光客や復興支援者の拠点にしようとするほか地元集会所としても活用を促す。

原子力発電所事故の風評被害で観光客が一時激減した福島県北塩原村では、旧小学校の体育館でチョウザメの養殖が行われている。新たな地場産業の目玉にしようとする。伊藤忠商事の裏磐梯パイクロットファーム(同村、遠藤清武社長)に村が5年間、無償で体育館を貸した。

「三宅島支援者の集い」にご参加ください

日時 12月14日 6時受付 場所 ビストロおきみくら
会費 五千円(飲み放題・全国の有名焼酎など) 年一度のイベント

福島民友

THE FUKUSHIMA MINYO

第3924号 (日刊)

2013年 (平成25年)

9月21日 (土曜日)

発行所 福島市柳町4-29

郵便番号 960-8648

福島民友新聞社

電話代番 (024) 523-1191

編集局 (024) 523-1390

販売局 (024) 523-1472

振替口座 02180-8-5070

©福島民友新聞社 2013

災害復興の影

■帰れない⑧

三宅島の雄山が噴火し、全島避難が行われた。05年に避難指示は解除されたが、ぜんそくの発作を誘発させる二酸化硫黄を含む火山ガスの噴出はその後も続く。

戻ったのはインフラ

避難指示解除の際、二酸化硫黄への感受性が高いと

同ネットワークは避難指示解除後も島に戻れない「在京島民」を支援するこ

除された8年前から横ばい状態が続く。「光り輝くほど立派」(佐藤)な道路が整備されたそばに、二酸化硫黄で腐食するままの家屋が放棄されている。在京島民は高齢化が著しい。佐藤は自嘲気味に語る。「帰島 環境省は今

に、富岡町から東京に避難実を直視し、避難者に今必要な対策を講じてほしい」市村は、こうも感じた。「帰還をめぐる先が見えない原発事故避難者が抱える

在京島民置き去り

三宅島と共通「先見えず」

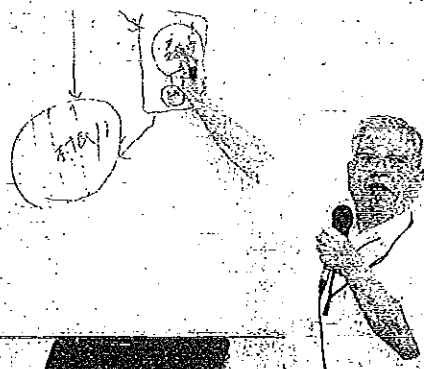
「避難者自身が声を上げ、行政を動かしていく必要がある」。今月14日、東京・世田谷の日体大。「三宅島から福島へのエール」と題した日本応用心理学会の研究集会で、「三宅島ふるさと再生ネットワーク」会長の佐藤就之(78)は、三宅島噴火に伴う自身の避難体験に基づき、原発事故避難者への助言を述べた。

2000(平成12)年、東京から南に約180キロ

三宅島と共通「先見えず」

行政は夢ばかり語る

14日の研究集会の会場



「三宅島から福島へのエール」と題した研究集会で、三宅島の現状を語る佐藤さん=14日、東京都世田谷区・日体大